

アリ・ラリジャニ イラン・イスラム共和国国会議長ご講演録

平成 22 年 2 月 25 日
於：ホテルオークラ東京
エメラルドルーム

神の御名において

笹川平和財団と羽生次郎会長に御礼申し上げます。

平和の追求を理念とする財団主催の下に講演出来ることを、光栄に思います。平和とはイスラム教の教義において、非常に重要な概念です。何故ならイスラムの啓典は公正を求める書だからです。また今日勃発している数々の戦争は圧政の象徴です。イスラム教徒の聖典コーランには、かような節があります。「神の啓示によれば、一人の人間を殺害すること、もしくはこの地上にて墮落させることは、全人類の殺戮に等しい。一人の命を救うことは、全人類の救済に等しい。」

すなわち、イスラム教では人の命は非常に尊いものとされ、もしそれを軽視するのなら、社会全体、全人類に悪影響が及ぶということです。このようにイスラム教の教義では、平和、暴力と圧政の象徴である戦争の抑止が、重要視されております。

我々は今日、幸運にも日出ずる国日本におります。故に同様の教えを説いている逸話を、禅の教典より引用いたします。名のある武士が師・白隠の下を訪れて尋ねた。「師よ、天国と地獄は存在するのでしょうか？」白隠は武士に尋ねた。「お前は何者だ？」武将は答えた。「私は皇帝の護衛兵をしております。」「戯言を。お前のような者を傍に置いておくなんて、何と愚かな皇帝よ。私から見れば、お前は卑しい人間だ。」武士は激昂して、刀を鞘から抜いた。白隠は言った。「おや、刀も持っているのか。どうせ私の首も落とせぬ代物に違いない。」武士はもはや怒りを抑えられず、刀を構えて前に進んだ。師は言った。「今半分答えを得たぞ。お前は今、地獄の門を開こうとしている。」武士は我に返り、刀を鞘に納めた。師は言った。「今残り半分の答えを得たぞ。お前は天国の門を開こうとしている。」

これは禅の教典における平和主義思想の一例です。このことから、平和というものが、全ての宗教で重要視されている問題であることが分かります。

しかし、何点か申し上げたいことがあります。第一点ですが、今日の世界は平和に向かって進んでいるのでしょうか？あるいは、禅の教典にて言うところの刀が、鞘から抜かれているのでしょうか、それとも鞘に納まっているのでしょうか？いくつか例を挙げれば、問題は明らかになるでしょう。

国際原子力機関（IAEA）において各国間の協議が行われている時、2つの目的に主眼が置かれていました。一つ目は大量破壊核兵器等の廃絶、二つ目は原子力の平和利用への支援です。

米国は2基の核爆弾で日本の2都市を爆撃して、何十万人もの人間を殺戮しましたが、それ以来今日に至るまで、核兵器の数は増えているではありませんか？米国は、1万基以上の核兵器の所有を高言して憚りません。ロシア、フランス、イギリスも数は違えど核を保有しており、イスラエルも数百に及ぶ核弾頭を保有しています。これに対してIAEAも、無為無策であります。

また別の事例として、過去30年間、紛争の件数は増加しているではありませんか？米国の扇動と西側の支援の下に、サダム・フセインはイランに侵攻しました。25万人の犠牲者が出ました。サダムは化学兵器も利用しました。前線だけでなく都市部においても。イランの都市、サルダシュトに化学爆弾を投下しました。イラクの都市、ハラブチェに化学爆弾を投下しました。この化学兵器をどこから入手したのでしょうか？西側諸国により提供されたのです。わが国では化学兵器により、十万人以上の死者、負傷者が出たのです。化学兵器による負傷者の一人を、皆様にご紹介いたしましょう。（ここにおられる）国会議員、ロトフィー工学士です。疑問に思うのは、当時多くの西側諸国やアラブ諸国がサダムの後ろ盾となり、イランに対して戦争を始めましたが、これは正しい行為でしたでしょうか、平和主義的な行為でしたでしょうか？あらゆる方面でサダムを支援しました。旧ソ連もサダムを支援しました。その後サダムはクウェートに侵攻しました。これらは皆さまがご存じの通りの、同地域での問題です。我々がかねてより、米国、西側諸国、アラブ諸国に対して、サダムは狂人であると伝えていました。しかしこれらの国々は、イスラム革命政権と対立していたため、サダムに武器を与えたのです。旧ソ連は、アフガニスタンに侵攻したではありませんか？数千人のアフガニスタン人を殺害したではありませんか？米国はアフガニスタンに侵攻したではありませんか？大勢のアフガニスタン人が、毎日犠牲になっているのを、皆様はご存知だと思います。麻薬の栽培とテロとの闘いを口実として。麻薬は削減されたのでしょうか？テロは沈静化された

でしょうか？どちらの答えも否です。

米国はイラクに侵攻したではありませんか？イラク人権省の発表によると、米国の手により85万人以上のイラク人が死亡、もしくは負傷しています。また5000人以上の米兵が戦死しました。

米国とイスラエルは、2006年にレバノンへ侵攻したではありませんか？何千人もの人々を殺害したではありませんか？昨年イスラエルがガザ地区に侵攻し、何千人もの女性や子供を殺害したではありませんか？白リン弾を使用したではありませんか？

他のアジア諸国も核兵器を製造しているではありませんか？米国は友好関係の為、見て見ぬふりをしています。しかしイランに関しては、IAEA加盟国でありNPT条約に参加、核兵器製造を目論んでいないと明言しており、かつ核兵器はイスラム法に反しているとの見解であるにも関わらず、干渉を続けています。この問題の根源は何でしょうか？この問題の根源は、米国の覇権主義です。イラン国民が独立を求めているため、イスラム革命政権と対立しているのです。我々は米国に従属的であった国王を追放しました。（当時）6万人以上の米国関係職員がイランに在留しており、あらゆる業務を掌握しておりました。国王は米国の意見を伺わずに、決定を下すことは出来ませんでした。そのような条件下で、米国は原子力関連の諸契約を、イランと締結したのです。それは約45年前のことです。今日問題となっているテヘランの実験炉も、米国がイランに売却したうえ、燃料供給の契約も結んだのです。ウラン濃縮の契約さえも、イランと締結したのです。しかし、イラン国民が独立への道を選択した為、イランと戦わなくてはならないというのが、米国の理論のようです。そしてイランの核問題に介入しています。

平和ですら干渉の道具とされている事態は、人類に対する警鐘です。私は明言いたします。我々は、日本をモデルとした原子力の平和利用を目指しています。それは核兵器ではありません。今日の世界情勢を見ると、様々な試みや平和のメッセージも空しく、戦争や紛争の増加は懸念すべきことであります。

さらに問いがあります。時には平和というものは、戦争よりも危険ではないでしょうか？奇妙な話をしているかもしれませんが、今日平和は戦争よりも危険な意味で利用されていると、認めざるを得なくなっています。殺戮が行われ、人命が危機に瀕するがゆえに、我々は戦争を忌避すべきものと考えています。

(しかしそれは) 嫌悪感をもたらし、ある種の戒めともなります。また破壊の痕跡を目撃した者は、そこから教訓を得ます。

戦争よりも危険なものは、徐々に忍び寄る死であります。今日の世界は、各方面で徐々に忍び寄る死に直面しています。ご覧ください、米国の一国主義戦略や先制攻撃の理論は、何のためでしょうか？世界支配のためです。しかしこうした戦略により、一国の独立が脅かされています。ある意味人類の威信が傷つけられています。社会のアイデンティティが失われています。その結果軍国主義がもたらされました。なぜなら人々は植民地主義、覇権主義の圧力にさらされ、己を防御せざるを得ず、戦争が起こるのです。これは反動をもたらし、人類の発展を阻害する、ある種の欺瞞です。これらの実例は、テロ、麻薬との闘いという大義名分のもとに占領された、アフガニスタンやその他の国々で見うけられます。しかし舞台裏ではタリバンと交渉していたのです。しかも彼ら自身が、麻薬の運搬に携わっていたのです。アフガニスタンの3つの空港を経由した麻薬の運搬に、米国やイギリスが関与しているという確かな情報を、我々は入手しています。テロとの闘いの名のもとにアフガニスタンに入国しながら、イラン国内でテロ活動するべく、アブドルマリク・リギに軍事支援を行いました。もちろんイランは実力を行使して彼を逮捕しており、彼は罪を償うことになるでしょう。こうしてある種の徐々に忍び寄る死が、人類にもたらされるのです。なぜなら犯罪が水面下で進行して、実感されることがないからです。

さらに自然の破壊という悲劇もあります。これも平和の擁護のもとで、進行している現象です。これは全人類にとって徐々に忍び寄る死であります。皆さんもご存じの通り、地球全体が危機にさらされています。海洋の枯渇。今後どれだけ多くの人々が犠牲になるか、明らかになっておりません。このことから、今後の世界の展望は不透明であると言えるでしょう。平和主義に距離を置こうと申しているのではありません、これまで以上に迅速に対策を講じていこうと申しているのです。千里の道も一歩から、という中国の格言があります。危機は深刻ではありますが、共通の思想をもってあらゆる現実を直視し、平和に向けての努力を重ねていかななくてはなりません。ここで識者の方々には、平和主義の名のもと偽計に陥られることがありませんように、皆様が真の平和を追求されますように、お願い申し上げます。

多くのお時間を頂戴致しました。しかしながら、日本の有識者の方々に前に、この名高き財団の下で講演出来たのは、貴重な機会でした。皆さま、ありがとうございます。

質疑応答

質問 1

時事通信の松尾と申します。ウランの問題なのですが、交換場所に日本、と言う名前が出てきたことがあったかと思えます。これはどの程度まで、実現を考えていらっしゃるのでしょうか？また今回の来日で、その件についてお話になられたのでしょうか？

質問 2

日本経済新聞中西と申します。先ほど核のお話がありました。ウランを国外に搬出して、濃度を高めてまた持ち帰る、これはもちろんイランはかねがね医療用の目的だと言っているのですけれども、この案について昨年の欧米との交渉では、議長はその案が持ち帰られたときに、あまり賛成なさっていなかったというような報道が、一様にありました。今の段階での、この案に関する議長のお考えをお伺い致します。

アリ・ラリジャニ イラン・イスラム共和国国会議長回答

お答えします。二つとも同じテーマにまつわるご質問かと思えます。問題の核心は何でしょうか？テヘランの実験炉は、約 40 年前に建設されました。米国が売却し、燃料の契約もイランと締結しました。革命が勃発し、我々は独裁者を追放しました。米国は契約を破棄し、燃料も提供せず、我々が支払った購入代金を持ち去りました。この原子炉の用途は何でしょうか？難病の治療薬製造です。燃料の提供がなかったので、我々は止むを得ず燃料の確保に奔走しました。その後アルゼンチンより購入しました。15年、20年以上、その燃料で稼働させました。IAEA の規定によると、燃料が底をつけば、他の燃料保有国より購入しなくてはなりません。疑問に思えるのは、85 万人の患者が成り行きを懸念しているのに、医薬品製造を目的とする同原子炉用の燃料を、どうして我々は入手できないのでしょうか？実際これは、米国のような諸外国に対して、我々が抱えている問題です。今日にでも売却してくれる国があれば、それがどこであろうと、我々は購入する用意があります。もし平和の構築を真に迫及しているのであれば、完全に人道目的の同案件に関しましては、売り手がいるはずと思います。

この問題が政治的に歪曲されて久しいです。何を根拠にこのような方策を取っているのかは不明です。どう考えても、我々には理解不能です。イランで製造されたウランを、搬出しようという話が出ることもあります。我々はIAEAの規定通りにウランを製造しているのに、どうして搬出しなくてはならないのでしょうか？今回搬出されたとしても、再び製造可能です。何故この問題が、複雑な政治問題へと発展したのか、本当に理解できません。もちろん、これは議論の余地がある問題です。日本を含む諸外国にも、この問題に関して見解があるでしょうし、我々は日本の主導的役割を歓迎いたします。日本は我々の友好国で、文化的にも類似点があります。我々は日本の主導的役割を歓迎いたします。回答は以上です。ご成功をお祈りいたします。(了)